

3 第1部 原始・古代

教科書を“読む”力を鍛える

—学び舎教科書の「ヘンダナ」を探そう—

水村 暁人

はじめに

「学び舎教科書」を用いて、2016年度1学期に「教科書のヘンダナ探し」を行った。「教科書のヘンダナ探し」とは、私の担当した中学2年生（当時）の生徒たちに対し、年間を通じて継続的に課したレポート課題の名称である。その大まかな内容は、①各生徒が授業時間外に自主的に「学び舎教科書」を読み、②自分なりに「ヘンダナ」と思う点を見つけ、③なぜその部分が「ヘンダナ」と思ったのかを記す、④それについて調べ考察する、というものである。

まず本実践を行った現場は、麻布中学校（以下、本校と表記）2年生「日本史」である。本校は中高一貫の男子校であり、1学年は43～45名×7クラスで構成されている（1学年約300名）。本校では、中2・3で「日本史」が必修科目として配置されており、中2では原始・古代～近世史、中3では近代・現代史を学ぶことになっている。

本稿では、中学2年生が実際に記した原始・古代史における「ヘンダナ探し」のレポート内容を紹介しつつ、生徒が「学び舎教科書」をどのように読み、どのような歴史学習をしたのかについて分析を行いたい。

1 「ヘンダナ探し」の設定と意図

(1) 課題の設定

まず肝心なのは「ヘンダナ」という語の意味であるが、新年度におけるレポートの提示に際し、生徒に対しては、以下のように定義し説明を加えた。

※「ヘンダナ」には以下のニュアンスがすべて含まれます

「知らなかった」、「えっ！ 何それ」、「自分のこれまで知ってたことと違う」などの驚き

「ほんとかなあ」、「うそっぽい」などの疑問

「興味が湧いてきた」「面白い」「もっと知りたい」など知的好奇心をかきたてられた事柄

このレポートでは、「ヘンダナ」という言葉に、文字通りの「ヘンだなあ」という疑問・違和感のみならず、より広義な意味合いをもたせた。新しい知識を得たときの驚き、新鮮な気持ち、あるいは知的好奇心をかき立てられてわくわくする感情など、教科書から生徒が具体的に感じ取ったすべての気持ちを「ヘンダナ」という言葉で表現することにした。場合によっては「この記述はおかしい」という教科書叙述そのものに対する批判なども可とした。

レポート提出はいつでも受け付けることとし、一人何枚でも提出して良いことにした。また「ヘンダナ」を探す範囲は、一応授業で扱った時代に限られることとした。結果、1学期で扱った古代史の範囲について、計75枚のレポートが提出された。

(2) 課題の意図

このレポートの意図は、まずは生徒自身が教科書をじっくり読む機会をつくること、さらに生徒が課題に取り組むなかで、教科書を「批判的に読む」あるいは「執筆者の目線で読む」、「教科書の行間を読む」ことにある。教科書採択前、私が「学び舎教科書」の審査用見本を最初に読んだときの読後感として、素材の提示の仕方やテーマ設定に新鮮な印象を持つ一方で、同時に細かい叙述について良い意味でも悪い意味でも「突っ込みどころが多い」という印象を抱いた。例えば38頁には「倭国で最初の仏教の指導者は、女性でした」という記述が突如として現れるが、周囲にそれに関する一切の補足説明はみられない。こうした点を現場教師として私はどのように受け止めたらよいのか、困惑したというのが正直なところである。

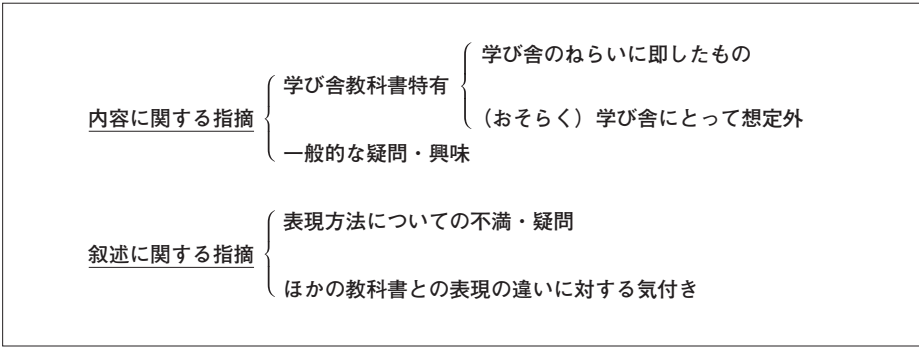
しかしながら、教材研究を進めるうちに、この「突っ込みどころ」の多さを逆

に利用することができないかと考えるようになった。つまり生徒自身に教科書の「突っ込みどころ」を発見してもらい、それについて考察をしてもらうことは有意義ではないかと考えたのである。生徒が「突っ込みどころ」を探しながら教科書を「批判的に読む」ことを通じて、教科書の示す事実が唯一絶対ではないことを発見したり、あるいは単なる暗記対象としての教科書観を覆す機会とできないか。そうした意図から、「ヘンダナ探し」という課題を、新学期早々より生徒に課すこととした。

2 生徒の課題レポートから

(1) 生徒による指摘の傾向

1学期間に集まった75枚のレポートを、内容の傾向ごとに分類してみた。簡単にまとめると以下になる。



まずレポート全体を眺めてみると、生徒が指摘する事柄には大きく分けて二つの方向性があることがわかる。一つには「内容に関する指摘」である。「教科書に〇〇と書いてあるが、それはなぜか」というものや、「小学校の時に〇〇だと習ったが、書いてあることが違う」などの指摘がこれにあたる。

例えば教科書43頁における「九州南部の隼人とよばれる人びとは、8世紀後半まで庸・調を課せられませんでした」という記述に対して、生徒からは「なぜ全国の人に課された庸や調が隼人には課せられなかったのか」というような疑問が寄せられた。また26頁では、縄文時代に「植物の栽培がはじまっていた」と

記してあるのに対し、生徒からは「縄文時代は狩猟採集生活の時代と習ったのにおかしい」、「なぜヒョウタンやマメの事例から栽培の事実がわかるのか」といった疑問がみられた。これらは、教科書に書かれている（その生徒にとっての）新たな事実に対して驚き、その理由を求めたものである。内容に関する指摘の多くは、このような既存の知識とのギャップによる素朴な「気付き」の類であった。今回のレポートでは、これまで知っていた知識と違うこと、今まで知らなかったことについて、こうした驚きや疑問を示したものが比較的多かったことが指摘できる。

次に挙げられる方向性は、「叙述に対する指摘」である。これは教科書の記述や表現そのものについて疑義を呈するタイプの指摘といえる。「学び舎教科書」の文章表現のあり方に対して、生徒は私が予想した以上に細かい点に気が付いていたように思われる。図版や側注における表記方法や、本文における主語の不明確な点、文章の矛盾点などを細かく指摘するレポートがみられた。

例えば、弥生時代の記述における、卑弥呼の弟と卑弥呼に仕えた「一人の男」が同一人物なのか否かが読み取りにくいという指摘（34頁）、同じく弥生時代の金印について、「紫色のひもで持ち手を結ん」でいたという記述（35頁）に対し「なぜひもは発見されていないのに紫色と断定できるのか」という指摘、44～45頁にかけて班田収授法に関する説明が重複していて読みづらくなっている点などへの指摘などが挙げられる。

(2) 「学び舎教科書」が引き出す好奇心

内容的な指摘であれ、叙述のしかたに関する指摘であれ、今回寄せられた「ヘンダナ」のなかには、「学び舎教科書」の特徴が活かされたものが少なくない。例えば29頁の写真「かめ棺にほうむられた骨」について、複数の生徒が関心を持ち、レポートを書いている。写真はいわゆる弥生時代の戦争開始を象徴する首のない遺骨を示している。この写真は弥生時代を記した他の教科書叙述においても多くみられるものであるが、「学び舎教科書」の場合、何の説明もなくただ「かめ棺にほうむられた骨」とだけ記している点に特徴がみられる。これに対し、複数の生徒が「なぜ頭だけきれいになくなっているのか」という疑問を提示し、

その疑問から戦争の時代到来を推理する考察を行った。こうした点は、「学び舎教科書」の工夫が生きた「ヘンダナ」であると考えられる。図に最初から「戦争によって切り取られた首」などとあえて記さないことによって、生徒は写真と時代状況を自分なりに考え合わせ、戦争と弥生時代を結び付けてとらえることができたのである。これはあえて書き込みすぎないことで生徒の学びが引き出されたケースとして評価できる。

加えて、この部分について「なぜかめ棺なのか」という点に切り込んだ生徒もいた。首ではなく甕棺のほうに注目を向けた事例である。その生徒は最終的に「偉い人ではなく一般の人が戦争に巻き込まれているから」というところにまで認識を深めることに成功している。あまり説明しすぎない、あえて答えを書かないという叙述方法が、効果的に生徒の好奇心を引き出し、生徒自ら腑に落ちる解釈を生み出し、最終的にその時代の理解をさらに深めることに成功した例といえよう。

3 「ヘンダナ探し」からみえる生徒の姿

(1) 唐突な記述に対する二つのとらえかた

「学び舎教科書」を読んだ生徒の多くが、叙述の唐突さを鋭く指摘している。「学び舎教科書」には、教師の目から見ても前後関係が見えにくい記述や、唐突な印象を受けるような記述が散見される。

唐突な記述に対する生徒の受け止め方には二つのタイプがみられる。一つは拒否反応・不安感をあらわにするタイプである。もう一つは、唐突な記述への驚きを興味のトリガーにして、さらに想像力を広げ自ら調べ始めるタイプである。

前者はいわゆる正解を求めたがるタイプの生徒といえる。そうした生徒にとって「学び舎教科書」はややとっつきにくい教科書といえるかもしれない。「学び舎教科書」にはいわゆるゴシック体の太字がいっさいないことが特徴といえるが、用語を暗記することを歴史学習と考えている生徒にとって、混乱や不安を生じさせる面がある。「学び舎教科書」は暗記すべきポイントをあらかじめ示しておらず、生徒が立ち止まるような記述が数多く仕掛けられているため、どのように読んだらよいのか迷ってしまうのである。

例えばある日の授業で、奈良東大寺の大仏に関する叙述（46頁）を読んだ生徒から、「先生、大仏に塗られた黄金は60キロあったと書いてありますが、この数字は覚えたほうがいいですか？」という質問を受けた。前者のタイプの生徒にとっては、唐突な数字の提示は混乱要素である。この場合、60という数字は暗記対象と映ってしまい、混乱が生じているのである。教師の視点からすれば、「60キロ」という数字からさまざまなことを想像してほしいところではあるが（金の量と大仏の大きさとの比較など）、生徒の受け止め方によってそれは単なる暗記対象に陥る場合がある。疑問を生む記述をどのように受け止めるかは、生徒によって大きく異なっている。

(2) 「ヘンだなあ」から「なぜかなあ」へ

また今回のレポートでは、「ヘンダナ」を見つけたうえで、それについて自分なりに調べ、それに関する見解を述べる＝「考察する」ことを課した。しかしながら「考察」の意味を理解できる生徒とできない生徒の差がみられた。

教科書を読み、「ヘンダナ」を見つけることは、ある意味容易なことである。教科書を読んで「ヘンだ」と思うのはまず感覚的なものであり、あまり前提の知識を持たなくても、ふと興味を引いたところをただ指摘すればよい。あるいは教科書叙述の「あら探し」をすればそれで済む。実際にそうした感覚的な指摘のみに終わるレポートも少なくなかった。疑問や違和感をきっかけにして、自らの知識や調べた内容と結びつけながら自分の頭で考えてみるということはなかなか容易ではない。課題の意図としては、教科書から何らかの疑問や違和感を感じ取ることをスタートにして、それを自分なりに「なぜ」というところまで考えてもらうことを想定していたが、予想以上にそこまで行き着かないレポートが多かった。「ヘンだなあ」から、「なぜかなあ」という認識レベルまで生徒の思考を引き上げるために、教師としてどのようなアプローチが可能かを考えることが今後の課題である。

おわりに

最後に「ヘンダナ探し」という実践を通じてみてきた「学び舎教科書」の特

徴を明示しつつ、いくつかこの教科書に対する私見（感想）を述べたい。

「学ぶ会」代表の安井俊夫氏が市販本解説で述べているように、「学び舎教科書」の最大の特徴は「疑問を生み出す教科書」である点といえる。今回の「ヘンダナ探し」の実践を通じて、たしかに生徒の疑問を引き出しやすい教科書であると実感した。

生徒たちは、これまで出会ったことのないタイプの教科書を読み、まずは混乱している様子が見受けられる。しかしそうした生徒の混乱は、教育現場においてむしろ積極的に（良い意味で）とらえるべきであろう。生徒が教科書を読んだ時の違和感や困惑は、うまく利用すれば生徒の好奇心のトリガーを引くことにつながる。トリガーを引くところまで生徒の気持ちをもっていくことができれば、生徒は自ら主体的に学んでいく。また教科書の行間に潜む疑問や矛盾を探す作業を通じて、「読む」力を鍛えていくことによって、正解主義・暗記主義の歴史観に風穴を開けることにもつながっていくと思われる。その意味で、「ヘンダナ探し」のような実践は有効な「学び舎教科書」の使い方の一つであろう。ただし生徒の「気付き」をさらに一步深めた考察のレベルまでいざなうため、教師がどこまで、どのように関わることができるかという点が現場に課された課題である。

また今回考察を書いてくれた生徒は、多くの場合、インターネットを利用して、疑問に対する自分なりの解答を得ていたようである。このレポートを生徒に課す際には、調べ方などについてはあまり細かい指導は行わなかった。今回はいわゆる情報リテラシー教育に主眼を置くのではなく、生徒に何よりもまず教科書を読んで素朴な疑問を発してもらうことを大事にし、あまり敷居を高くして身構えてしまわないようにと考えたがゆえである。ただし今後は生徒の習熟度に応じながら、調べ方についても教師が徐々に生徒へ働き掛けていくことが必要となろう。

最後に、今回「ヘンダナ探し」を課すなかで、教師という立場から見ても、どのような意味合いで書かれているのか迷う叙述がいくつかみられたことを付言しておきたい。あえて答えを書かない、書き込みすぎないことで疑問を生み出すというのがこの教科書の大きな特徴といえるが、それにしても唐突すぎて前後の文脈からその叙述の意味が読み取りにくい箇所が見られる。あえて生徒の好奇心を引くためにあいまいにしているのか、もしそうだとすればその記述はどのような

狙いでそう書いてあるのか、その記述の根拠となる史料は何なのかなど、『指導書』等である程度執筆意図や史料的な裏付けを紹介してもらえると、現場としてはより意図的に生徒の好奇心を引き出しやすくなるのではないだろうか。現場教師とより身近にリンクした『指導書』の登場を期待したい。

今回は2016年1学期のみをサンプルとして抽出したが、「ヘンダナ探し」は2学期以降も継続して行っている。2学期は中世史に関するレポートが続々と集まってきた。「学び舎教科書」の使用も半年が過ぎ、教科書と生徒との距離も縮まり、教科書との“対話”もよりかみ合ってきた印象である。また機会があれば2学期以降に生徒が発見した「ヘンダナ」を紹介させていただきたいと思う。

〈附記〉

本稿は、2016年8月21日、武蔵大学にて行われた第7回「子どもと学ぶ歴史教科書の会」全体会における実践報告に基づくものである。当日の報告要旨および質疑応答（議事録）は、すでに「学ぶ会メール 特別号」（2016年9月24日発行）にも掲載されている。合わせて参照頂きたい。

【参考文献】

拙稿「歴史教科書を学び捨てる」歴史学研究会編『歴史を社会に活かす』東京大学出版会 2017年

（私立中学校教員）